
バカとテストと観測者

ゴードン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと観測者

【Nコード】

N0137Z

【作者名】

ゴードン

【あらすじ】

世界の崩壊を防ぐためパラレルワールドの世界から『未来日記』を持ってやって来た少年探偵『秋瀬或』。狂った因果の行きつく先は……！？

P r o l o g u e , 1 : 作られた観測者（前書き）

バカテスと未来日記（秋瀬君）のクロスですね。

秋瀬君が個人的に好きなので活躍させようと思います。

Prologue, 1..作られた観測者

—side 秋瀬或—

「20XX／6／1」

僕の名前は秋瀬或。世界的な探偵を目指している。数日前、僕はこのところ桜見市を騒がすいくつかの事件について一つの発見をしたのだった。

「天野雪輝……か」

その名前はすべての事件に関わっている少年の名前。

「……………！」

と、その時。僕の前に1つの渦のようなものが現れ、僕は吸い込まれてしまった……！

〔第一因果律大聖堂〕

「来たか、秋瀬或……」

「……あなたは？」

「私はパラレルワールドのデウス・エクス・マキナ……いや、その思念体といった正しいか……。時間と空間の神で、お前を作り出した存在だ」

「僕を……、作り出した？」

「ああ、お前は変動し続ける未来を観測するため作られた観測者だ」

観測者？　　ってことは僕は神に作られた一つの駒だったってことか？

「なんで僕をこんなところに？」

「この世界の崩壊を防ぐためだ」

世界の崩壊？　それと僕に何の関係があるって言うんだ。

「お前は本来、この世界のストッパーとしていたべき存在だった。だが不正に世界に干渉してくる者の手によってこの世界のお前は消滅してしまった」

「だから並行世界の僕を呼び出したというわけですか？」

「ああ。だが、お前が元いた世界は存在しない。だから、別の並行世界に行ってもらうことになる」

じゃあ、桜見市も存在しないというわけだ。誰が世界の理を崩したんだろう？

「すまない……。私の力不足でこんなことに……」

「いえ……。やり残したことも多々ありますが、でもこの謎も解いてみたいですね。……ですが」

「何だ？」

「依頼人として報酬がほしいところです」

そう言うとデウスはフツと笑って。

「それなら問題ない。自分の携帯を覚えてみる」

「……？」

パカッと携帯を開いて中を確認する。

「なっ……!」

『8…00 〔第一因果律大聖堂〕

僕は未来日記の力を手に入れ、並行世界に行く。

X…XX 〔並行世界 自宅〕

並行世界の僕の家はアパートのようだ。
生活用品などはそろっている。

X…XX 〔並行世界 自宅〕

この世界の僕は高校生だったようだ。

だが、学校には通っていないみたいだね。

』

「これは……!」

「お前の周りとお前自身の未来を告げる未来日記、『観測日記』だ。
これさえあればお前は世界を調律が可能になる。あと、並行世界の
人間には未来日記は見えん」

その時、僕の頭の中にブワッと大量の情報が入って来た。これは
……、何かの記憶……?」

「心配ない。並行世界のお前の記憶を転送しただけだ。そろそろ、
崩壊が始まる。早く行け」

「……最後に1ついいですか?」

「何だ……?」

「僕が今までやっていたことは誰の意思だったんですか……?」
「……お前の意思だ」

その時、周りに光が現れ僕はどこかに転送された。

P r o l o g u e , 1 : 作られた観測者（後書き）

【観測日記】

自分自身とその周りの未来を予知する日記。

簡単にいえば『無差別日記』と『雪輝日記』の両方の性質をもつ未来日記。

秋瀬或はこれを使うことによって並行世界の調律ができる。

Prologue, 2: 介入の始まり

—side 秋瀬或一

「20XX／3／27」〔並行世界 秋瀬或宅〕

時間と空間の狭間をぐぐりぬけて、並行世界に行くと、

「うわっと!」

ベットに落ちた。どうやらここが僕の家のようなだ。

「へえ……、随分と家具は揃ってるね。父さんと母さんはいないのか……」

並行世界だしね、なんて言っていたら携帯がなった。どうやらあの神様からメールらしい。

【from デウス・エクス・マキナ】

どうやら無事に並行世界に着くことができたようだな。早速で悪いんだがお前は因果律の中心である文月学園に編入してくる生徒ということになっている。年齢は上げておいたから高校二年生ということになる。その学校の制度はパソコンに入れておいた。こちらは因果律の修復と改変があるから返信は今度にしてくれ。後は好きなようにやってくれ。

「年齢を上げるなんて流石は神って所ですね……」

それにしても学校の制度ねえ……。そういえば日記は……？

『4…00 「自宅」

この世界の僕は高校生だったようだ。

だが、学校には通ってないみたいだね。

4…04 「自宅」

どうやら僕が通うことになる学校は文月学園というらしい。

振り分け試験なるものは3／28に行われるらしい。』

「振り分け試験ねえ……。何でそんなものを？ とりあえず確認してみるところでしょうか」

パソコンの前の椅子に座り、電源を入れる。

「えっと……。あったあった。このフォルダだ」

そこには『並行世界データ』というフォルダがあった。

どうやら、文月学園はテストの点数という物に上限というものがないらしい。制限時間の中で無制限の問題が用意されており、能力次第でいくらでも点数を伸ばすことができる。そして極め付けが『試験召喚システム』というもの。テストの点数に応じた強さを持つ『召喚獣』を行使して戦うシステム。

そして生徒の勉強に対するモチベーションを高めるために提案さ

れた先進的な試み。それが『召喚獣』を使って行うクラス単位の戦争、試験召喚戦争。それは勝つとそのクラスと設備を入れ替えることのできるというシステムだ。

文月学園には成績順にA～Fにクラスが分けられていて、上位クラスになるほど設備が良く、下位クラスになるほど設備が悪い。そして下位クラスは上位クラスに勝って設備を奪うために、上位クラスは設備を守るために勉強する。そうやって生徒のモチベーションを高めるのだ。

「随分と残酷なシステムだね。いい設備の方がいいし、こりゃ今夜は一夜漬けかな？」

これらのことを考えるとこの世界の主軸はどう考えても最下位クラスのFだけど、そこに飛び込むほどバカじゃないしね。

「んじゃ、勉強頑張ろうかな」

「20XX／3／28」 「文月学園2・C教室」

時と場所が飛んで今は振り分け試験中。あれ？ 誰に説明してるんだ僕は。

「（流石は試験校って所だね……。結構難しいや）」

元は中学生だけど探偵だからね。勉強を怠ったことはないよ。

「（……そういえばあの神様は未来日記は並行世界の人間には見え

ないって言ってたけど……」

携帯を開いて机の上に置いてみる。だけど試験監督は素通り。

「（本当に見えないのか……！ あれ？ 日記になにか書いてある）」

『10…32 「文月学園2・C教室」

試験科目は現代国語。解答は、

？（1）向日葵

（2）堇

（3）山茶花

（4）蒲公英

（5）胡桃

』

「（……これじゃ勉強した意味がないような……）」

未来日記を使うのは流石に卑怯だと思ったので使わないでテストを解いた。

Member, 1: 秋瀬或

《Name》

秋瀬或

《Remarks》

二年Aクラス代表、学年主席。

《Outline》

ミステリアスな雰囲気を持つ美少年。世界的な探偵になるのが夢で、周囲で起きている事件を自分なりに調べている。

並行世界からやってきた世界の因果律を安定させるストッパーで、神に作られた変化し続ける未来を見るための観測者という存在。

ちなみに天野雪輝や我妻由乃とは出会っていない。

《Capability》

学力は霧島翔子以上で、頭の回転は坂本雄二をも凌ぐ。得意科目は物理や数学（600～800点）で、苦手科目（？）は保健体育（300点～400点）。

《Summons beast》

武器は常に鎧の中に大量に隠している。

腕輪は対象の召喚獣を操る“操り人形”
マリオネット

《Diary》

〔観測日記〕

自分の周りで起きることと、自分自身に起きることの場所と時間と内容を予知する未来日記。

並行世界の人間はこれを見ることが出来ない。

これを持つことで秋瀬或は並行世界の調律が出来る。

M e m b e r, 1 : 秋瀬或（後書き）

こんなところです。

後で色々付け足したりするかもしれませんが。

Diary, 1.. 始まりの教室

「20XX／4／1」 「文月学園2・A教室」

—side Aクラス—

「皆さん進級おめでとうございます。私はこの二年A組の担任、高橋洋子です。よろしくお願いします」

そう言うのは髪を後ろでお団子状にまとめ、眼鏡をかけてスーツを着こなした教師の高橋洋子。

「まずは設備の確認をします。ノートパソコン、個人エアコン、冷蔵庫、リクライニングシートその他の設備に不備のある人はいいますか？」

Aクラスの教室は普通に授業を受けるには過剰な設備があった。

「参考書や教科書などの学習資料はもとより、冷蔵庫の中身に関しても全て学園が支給致します。他にも何か必要なものがあれば遠慮などすることなく何でも申し出てください」

だが全てのクラスがこうではない。Aクラスは文月学園の上位50位の生徒たちが在籍してるからだ。そしてこの学校の最大の特徴『試験召喚戦争』で各クラスのモチベーションを上げるためでもある。

「では、はじめにクラス代表を紹介します。秋瀬或君。前に来てください」

Aクラス内がざわつく。それもそのはず、名前を呼ばれた生徒が誰も知らない転校生だったのだから。

「……？ 秋瀬君？」

だが呼ばれた生徒は一向に出てくる気配はない。いや、クラスにいる気配がない。ふと見ると机の一つのスペースがポカンと空いていた。

まあ、言ってしまうと秋瀬或は初日から遅刻をしたのである。

「仕方ありません、では霧島翔子さん。前に来てください」

「……はい」

名前を呼ばれて立ち上がったのは学年次席の霧島翔子。少し物静かな雰囲気を持っている。彼女は本来は学年主席になるはずだったが予期せぬ介入者が主席になってしまったため学年次席の座にいる。

「へえ、初日から遅刻なんて面白そうな子だね。ね、優子？」

そう呑気な口調でこそ隣の生徒と話すのは少し性に翻弄なAクラスの生徒である工藤愛子。そして、話題を振られた生徒である木下優子は少しイライラした様子で話す。

「そうでもないでしょ。どうせ勉強はできるけど相手を見下すような奴だよ、きつと」

「え、ボクは興味を持ちちゃったカナ」

そんな頃、秋瀬或は……、

「20XX／4／1」〔文月学園通学路〕

—side 秋瀬或—

しまったな……。つい情報収集に夢中で遅刻しちゃったよ……。

「……まあ、面白い情報も手に入ったしね」

興味がわいたよ文月学園……。

「秋瀬、遅刻だぞ」

などと考えているとドスの聞いた声に呼び止められる。声のした方を見ると、そこには浅黒い肌をした短髪のいかにもスポーツマン然とした男が立っていた。

「ああ、28号………スネーク先生。おはようございます」

「おい、今言い直そうとしたのに俺の顔を見てさらにおかしくしなかったか？」

「そんなことないですよ？ 僕は探偵ですから」

「いや、それは関係ないと思うが……。まあいい受け取れ」

「ありがとうございます」

どうやらクラス分けの紙のようだ。この前受けた振り分け試験の結果でクラスが決まるのである。でも一人一人にこうやって配るのかな？

「まさか吉井以上に遅刻する奴がいて、さらにそいつが学年主席だなんてな……」

「吉井……？ それって観察処分者の吉井明久君ですか？」

観察処分者とは、学生生活を営む上で問題のある生徒に課せられる処分で召喚獣で教師の雑用を行う。そのためか召喚獣が物理干渉ができる上に、雑用で召喚獣をたくさん行使するため難しいと言われる操作が上手い。

「ああ……。知り合いなのか？」

「いえ、調べてみて分かったんですが面白い人だと思って」

「そうか、お前はあいつの様にならんでくれよ……」

「ははっ、まあ頑張ってみますよ」

クラス分けの用紙が入った封筒をビリビリ破いて校舎に歩く。

『秋瀬或……Aクラス代表』

ワオ、まさか代表になってしまうとは。これなら未来日記を使わなくても勉強はついていけるな。

「20XX／4／1」〔文月学園2・A教室前〕

どこかのホテルのような扉を開けて周りを見渡すと、この前学園を案内してくれた先生がいた。

「あ、遅れました。すみません高橋先生」

「いえ、構いませんよ秋瀬君」

そそくさと教室に入って高橋先生に挨拶をすませる。少し周りの視線が気になる。

「では、秋瀬君は試験召喚獣の実習があるので少し教室で待ってて下さい」

「あ、了解です」

そう言って高橋先生は教室から出て行った。何か準備が必要なのかな？　その後、僕に何人かの人が近づいてきた。

「あ、君がああ秋瀬或君？」

最初に話しかけてきたのはショートカットのボーイッシュな女の子。

「そうけど、君は？」

「ボクは工藤愛子だよ。趣味は水泳と音楽鑑賞で、スリーサイズは上から78・56・79、特技はパンチラで好きな食べ物はシュー

クリームだよ」

「へえ……、いい趣味をしてるね。僕は秋瀬或。世界的な探偵を目指してるんだ。特技は格闘術、好きな食べ物はカップラーメンです」

「……あれ？ 秋瀬君はボクに興味を持ってくれないのかな？」

「そんな事はありませんよ？ 君が魅力的な女性だということは分かります」

「え……！？（キューン）」

急に工藤さんは俯いてしまった。どうしたんだろう……？

「へえー、あの愛子を言い負かすなんて凄いね」

「……ホントに凄い」

今度は黒髪のいかにも日本女性といった感じの人と茶髪の髪に髪留めを付けた子が話しかけてきた。

「あれ？ 君は確か学年次席の……えーと……」

「……翔子、霧島翔子」

「ああ、霧島さん。これからよろしくね」

「……よろしく」

ガシッと握手を交わす。うんうん、これからはクラスをまとめて

もらわないといけないしね。僕はそんな柄じゃないし。

「私は木下優子よ。まったく初日から遅刻なんて良い神経してるわね？」

「ここは謎に満ちてるからね。時間の進みなんて忘れちゃうのさ」

「ふーん」

そんな雑談をしているうちに高橋先生が教室に戻ってきた。

「秋瀬君。準備が整いましたので学園長室まで来てください」

「あ、はい。じゃあまた後でね工藤さん、霧島さん、木下さん」

高橋先生について教室を出て行く。それにしても、学園長室ってことは試験召喚システムの開発者にいきなりご対面できるなんてね。

『……………／／／』

『……………どうする優子？ 愛子が完全にトリップしてる』

『愛子は意外と押しに弱いんだね。まあしばらく様子を見ましょ？』

『……………わかった』

Diary, 1…END

↓Next Diary, 2…観測者の力

Diary, 2..観測者の力

「20XX／4／1」〔文月学園、学園長室前〕

—side 秋瀬或—

教室を出て、新校舎の1階にある部屋の前に来ていた。どうやらここが学園長室のようだ。

「失礼します学園長。秋瀬君を連れてきました」

高橋先生がそう言う中から「入りな」という声が聞こえた。

「ほう……、アンタが秋瀬或かい？」

中にはなんと人間の皮をかぶった妖怪がいた。

「今、物凄く不快なことを思われた気がするんだがね……」

「気のせいですよ妖怪長」

「アンタだね！ アタシに対して不快になることを思ったのはアンタだね！？」

「あ、すいませんでした。ぬらりひょんさん」

「アタシは妖怪の総大将になった覚えはないよ！」

などと僕とぬらりひょんさんが喋っていると高橋先生が仲裁を始めた。

「秋瀬君、今日は用事があったんですから。ぬらりひょんさんも余りむきにならないで下さい」

「今の言葉でむきになってはいけないのかねえ……」

「で、僕は何をすればいいんですか？」

確か試験召喚獣の実習がなんとかって言ってたけど。

「秋瀬君は召喚獣を呼び出して少し動かせるようになればいいんですよ。フィールドは私が張ります」

そう言うあたりが少し特殊なフィールドになった。凄いなこれは……。

「確か掛け声は……試験^{サモン}召喚！」

すると、足元に幾何学的な魔方陣が現れる。その中から召喚獣と呼ばれるものが現れた。

『Aクラス 秋瀬或』

総合科目 6842点』

「……？ 武器は？」

現れた召喚獣は、僕をデフォルメしたようなもの。だが鎧以外に

武器を何も持っていない。

「おかしいですね？ 秋瀬君の点数はトップレベルですから豪華な武器を持ってるはずなのに……」

「だいじょうぶだよ。どうやら鎧の中に収納してるようだからね」
なるほど、仕込み刀って所か。

「操作ってのはどうやるんですか？」

「頭に意識を集中して、イメージをするんだよ。やってみな」

「はい」

とりあえず、武器を取りださないとね。えっと……、剣で良いかな。

「おお、剣を取り出した！」

じゃ、剣を振いながら移動。

「凄い凄い！ 動き回りながら剣を振ってる！」

などとはしゃいでいると、

「おかしいねえ……」

などとぬらりひょんさんが言いだした。

「どういことですか、学園長？」

「召喚獣の操作はイメージと少し誤差がある。だから難しいんだよ。でもこのガキにはその誤差が全くない。あの観察処分者以上にね」

「全く操作を行ったことのない秋瀬君が上手く操作を行えるのは指示と行動の誤差がないからという訳ですか？」

まさかデウスの奴、僕に召喚獣の操作を上手くやらせるために何か仕掛けたな？

「そうだ。アンタ何者だい？」

「ふふっ、秘密です」

などと言いながら学園長室を出る。まあ召喚獣も見れたし、もうここに用はないしね。

「20XX／4／1」 「文月学園2・A教室」

「木下さん、今日の授業は？」

あの後教室に戻ってみると、ディスプレイにでかかと自習と書いてあった。

「今日はないよ。どうやらFクラスがDクラスと試験召喚戦争を始めたからだって」

「へえ……、Fクラスがね……」

「まあDクラスの勝ちで終わるでしょ。Fクラスなんて所詮ドロツプアウトの集まりなんだから」

「……Fクラスには雄二がいる」

「雄二って、確か神童とか言われてた坂本雄二？」

確かFクラスの代表だね。過去には『神童』とか『悪鬼羅刹』とか呼ばれてたらしいけど。

「……うん。雄二の指揮力は凄い」

「でも一人凄い奴がいたとしても大したことはないんじゃないの？」

「僕は少しFクラスのことを調べたんだけど、姫路瑞希って子が途中退席でFクラスらしいよ」

確か去年の学年主席の人だ。体が弱いのが弱点ってところかな？

「姫路瑞希!？」

「……それが本当なら恐らくFクラスが勝つ」

霧島さんにここまで言わせるなんて、相当凄いんだな。姫路って子は。

「それにしてもさっきから気になってたんだけど、工藤さんはどうしたの？」

「ああ、気にしないで良いわよ」

「……少しトリップしてるだけ」

「そ、そうなんだ」

D i a r y , 2 .. E N D

↓ N e x t D i a r y , 3 .. 加速／ストーリー

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0137z/>

バカとテストと観測者

2011年12月3日21時47分発行